

ロータリーの職業奉仕 知っておきたい 四大用語

- 第1 「ロータリーの樹」
- 第2 「最もよく奉仕する者、
最も多く報いられる」
「超我の奉仕」
- 第3 「四つのテスト」
- 第4 「ロータリーは人づくり」



国際ロータリー第2660地区
2019-2020年度 職業奉仕委員会

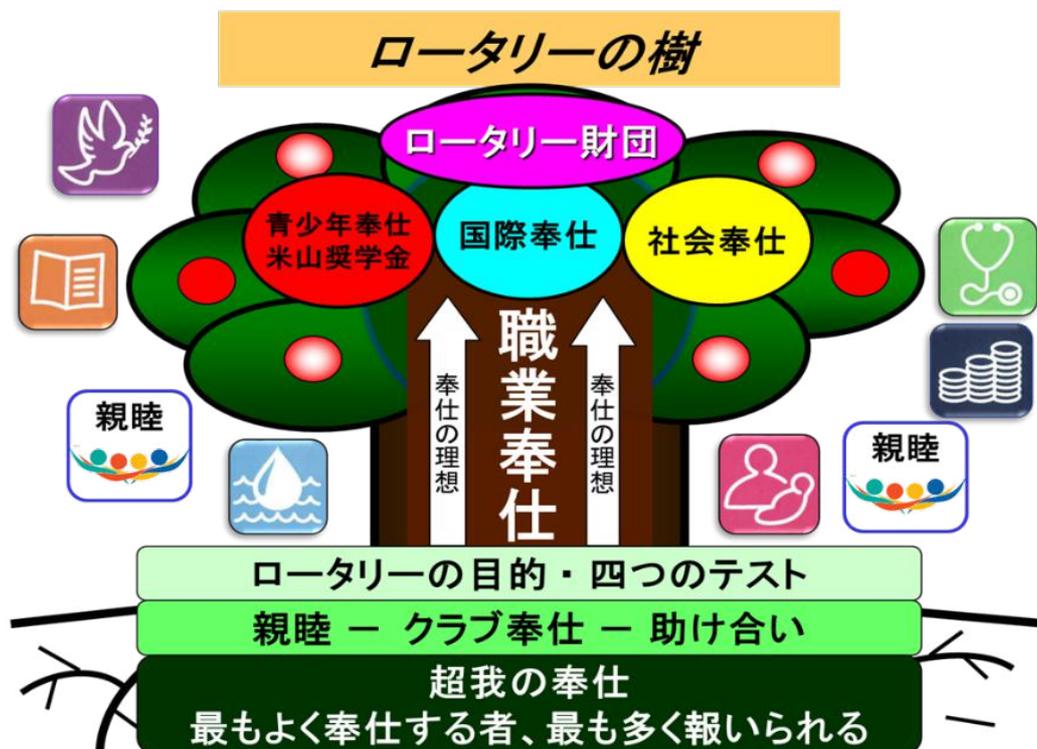
ロータリーの職業奉仕に関する四大用語について、卓話をさせていただきたいと思います。

- 1 「ロータリーの樹」
- 2 「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」「超我の奉仕」
- 3 「四つのテスト」
- 4 「ロータリーは人づくり」

の四つについて、順次、ご説明させていただきます。

この卓話モデル 2 は、もともと前半と後半に分かれていたものを合わせて作成いたしました。また、職業奉仕の理解を少しでも深めていただくための記述も追加しております。従いまして、30 分の卓話に利用される場合には、四つの用語のうち、その時々テーマを考慮した二つ程度に絞るとともに、説明内容も適宜抜粋したうえで実施していただきますようお願いいたします。

また、卓話 1 と同様に、解説文のほとんどを末尾に示す文献より引用しております。ご了解いただきますとともに、この場をお借りして感謝申し上げます。



* 『ロータリーの樹・2008』を一部修正いたしております。 ²

「ロータリーの樹」はロータリーの職業奉仕を理解する最も良い資料です。

ロータリーの樹の歴史ですが、これは2008年RI国際協議会の全体会議において、渡辺好政RI理事が「ロータリーの樹・2008」と銘打ってロータリーを「1本の樹」に例えて、ロータリーの奉仕活動における職業奉仕の位置づけを行いながら、「ロータリーにおける職業奉仕の重要性について」の講演を行った時のものを一部修正し、シカゴにおいて開催された2013年RI規定審議会の審議を経て採択されたものであり、このロータリーの樹は基本理念である、The ideal of service（奉仕の理念）を実践する手段が職業奉仕であることを解り易くした図です。

このロータリーの樹を「奉仕」という視点から見ますと、クラブ奉仕はロータリーの樹に水と栄養を送る「根」であり、職業奉仕はその上に成長する「幹」です。そして枝が伸びて実った果実として青少年奉仕、社会奉仕、国際奉仕あるいは米山奨学金、ロータリー財団に基づく奉仕活動などがあります。

また「根」としてはクラブ奉仕の他に、「ロータリーの目的」や「四つのテスト」、そして「超我の奉仕」、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という二つの標語が示されています。そして「幹」として、職業奉仕と並んで「奉仕の理想」が記されているわけです。

このように、ロータリーの活動の概念を視覚的に理解できるように表現しているのが、このロータリーの樹だと言えるでしょう。

2008年RI国際協議会
「ロータリーにおける職業奉仕の重要性について」講演 渡辺好政RI理事

「ロータリーの樹・2008」 → 2013年RI規定審議会で採択

「1905年、ポール・ハリスら4名によって創始された最初のロータリークラブは、その歴史が示すように、初めに、親睦、助け合いから始まりました。

すなわち、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」は「クラブ奉仕」であります。ロータリークラブ会員は、クラブという学校で相手のことに思いを馳せ、相手を助けるという『奉仕の理想』を学び、その真意が『共存共栄』であることがわかります。

『クラブ会員』は、ロータリーの目的を基本として、H.テラーによって実証され、ロータリアンの行動規範である「四つのテスト」による奉仕活動の実際を体得することによって、『ロータリアン』に進化してまいります。

ロータリークラブ会員からロータリアンに進化してゆく過程の基盤には、A.シエルドンの『超我の奉仕』『最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる』が存在いたします。私たちは、この2つのモットーを一枚のコインの表・裏と考えながら、日常の奉仕活動に邁進しております。ロータリーは「理念の高唱」に終わるのではなく「行動の哲学」なのであります。」

3

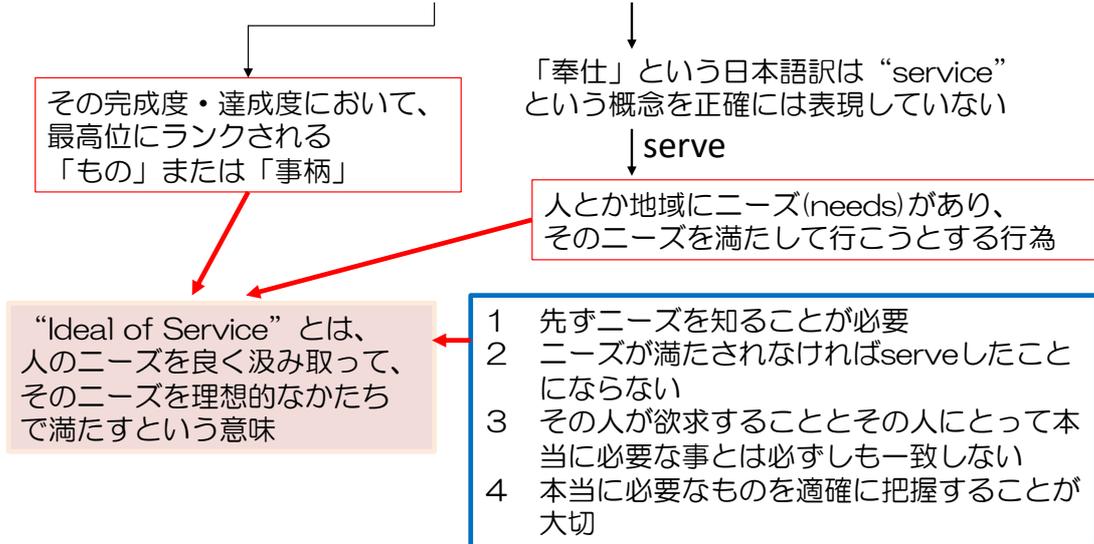
渡辺好政氏は、以下のように述べています。

「1905年、ポール・ハリスら4名によって創始された最初のロータリー・クラブは、その歴史が示すように、初めに、親睦、助け合いから始まりました。すなわち、ロータリーの樹に水と栄養を送る「根」は「クラブ奉仕」であります。ロータリー・クラブ会員は、クラブという学校で相手のことに思いを馳せ、相手を助けるという『奉仕の理想』を学び、その真意が『共存共栄』であることが、このロータリーの樹から解ると思います。『クラブ会員』は、ロータリーの目的を基本として、ハーバート・テラーによって実証され、ロータリアンの行動規範である「四つのテスト」による奉仕活動の実際を体得することによって、『ロータリアン』に進化してまいります。ロータリーは「理念の高唱」に終わるのではなく、「行動の哲学」なのであります。」

奉仕の理想

『ロータリーの目的』

“Ideal of service”



4

ここで「奉仕の理想」について述べておきましょう。

奉仕の理想はロータリーの目的(綱領)の中にある“Ideal of Service”が直訳された言葉で「奉仕という理想」という意味です。

service と云う言葉の日本語訳として“奉仕”という言葉がその意味に近く、他に適切な言葉がなかったので訳語として当てられたのですが、“奉仕”は service という概念を正確には表現していません。米山梅吉さんをはじめ、ロータリーの偉大な先人たちの中には service に適当な日本語訳はないので、むしろそのまま「サービス」として用いるべきだという方も多くいらっしゃいます。また、日本語となってしまった“サービス”という言葉が「おまけ」、「お得」的な意味に使われているのも、service の正しい理解を妨げています。

要は、“service”という言葉で英語圏の人が頭に浮かべる概念と同じ概念を、我々が「奉仕」と云う言葉で頭に浮かべることができればよいわけです。そのためには service の概念をしっかりと理解する必要があります。

5

service の動詞形は serve で、どういう動作を称して serve というかと云いますと、「人とか地域にニーズ(needs)があり、そのニーズを満たして行こうとする行為」を serve というのです。従って、serve という動作を行うためには先ずニーズを知ることが必要です。ニーズが満たされなければ serve したことにならないのです。

バレーやテニスで最初に打つボールをどうして serve というかといいますと、ボール遊びをしたいというニーズがある。そして、かまえて、ボールがくるのを待っている、そのニーズを満たす行為とは、そこへボールを提供する事だから、最初にボールを提供する行為を serve というのです。

レストランでの food service、病院での medical service もそれぞれそこを訪れる方のニーズを満たす行為をいいますし、行政サービスも市民のニーズを満たすためですから、英語では civil service といいます。キリスト教の礼拝を service というのは、神に背いた人間を神のもとへ立ち返らせて和解したいという神のニーズがあり、そのニーズを満たす行為とは、くだけたる魂をもって、祭壇にぬかずくことですから、そういった行為である礼拝の事を service、すなわち divine service といいます。

ニーズを満たす行為をサービスと云うのですが、その人が欲求することとその人にとって本当に必要な事とは必ずしも一致しないのです。本当に必要なものを適確に把握することが大切です。

次に、Ideal とは その完成度・達成度において、最高位にランクされる「もの」、または、「事柄」のことですから、“Ideal of Service” とは、人のニーズを良く汲み取って、そのニーズを理想的なかたちで満たすという意味です。そして、これを生活の場すべてに適用して行くように努力しましょうと云うのがロータリーの目的(綱領)なのです。

今のロータリー章典には「奉仕の理想」“Ideal of Service”をはっきりと定義した文章はありませんが、毎年発刊される Official Directory (全世界のロータリークラブと会員の名簿)の背表紙の裏に次のような英文が書かれています。

「Rotary clubs everywhere have one basic ideal-the "Ideal of Service", which is thoughtfulness of and helpfulness to others.」(すべてのロータリークラブの基本的な理想は「奉仕の理想」である、それは他人に対する思いやりの心、助け合いの心である)

二つのモットー（標語）

1 職業奉仕理念

最もよく奉仕する者、最も多く報いられる
(One profits most who serves best)

2 人道的奉仕活動の理念

超我の奉仕
(Service above self)

5

それでは、「ロータリーの樹」を終わって、次のテーマに入りましょう。

ロータリーには、二つのモットー（標語）があります。

RI 第2680地区のPastorガバナー田中毅氏は、『シェルドンの森 ロータリーの真実を求めて』の中で、ロータリーには二つの奉仕理念があり、一つは職業奉仕理念「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」であり、もう一つは人道的奉仕活動の理念とされる「超我の奉仕」である、と述べています。

また、RI 第2840地区Pastorガバナー本田博己氏は、『ロータリーの希望 —「奉仕の理念」とその実践をめぐって—』の中で、次のように述べています。

第1モットーは、「超我の奉仕」“Service Above Self”。そして、第2モットーが、アーサー・F・シェルドンの言葉で知られる「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」“He Profits Most Who Serves Best”です。ここで重要なのは、初期のロータリアンが、この二つのモットーが「奉仕の理想」の意味を表していると認識していた、ということです。

この二つのモットーの日本語訳については、昔から議論がありました。特に、第1モットーの「超我の奉仕」は「超我」が造語でもあり、カッコよいが意味がよくわからない、といわれていました。日本のロータリーの創始者である米山梅吉翁は、これを「サービス第一、自己第二」とか「自己に先立つサービス」と訳しました。「超我の奉仕」より原義が伝わると思います。第2モットーも、「最善のサービスをすれば、結果として最大の利益が得られる」とでも訳したほうがわかりやすいでしょう。

この2つのモットーは1950年のデトロイト国際大会で公式モットーとして採択され、1989年の規定審議会で、それぞれ第1モットー、第2モットーとして別々に示されることになりました。そして最近では、モットー(標語)といえば、第1モットーの「超我の奉仕」“Service Above Self” だけを示すようになっていきます。

以上が本田氏の記述です。

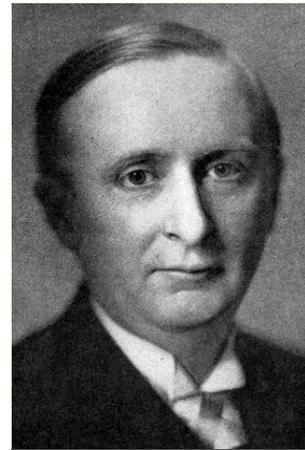
それでは、これらの二つのモットーについて、第2のモットー、第1のモットーの順に、考えてみることにしましょう。

「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」

1910 全米ロータリー大会（シカゴ）～1911（ポートランド）

アーサー・フレデリック・シェルドン
He profits most who serves his fellows best

- 1921年、シェルドンが
「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」
(He profits most who serves best)
に修正し、行動理念として提唱。
- 2004年の規定審議会でHeをThey、
2010年の規定審議会でTheyをOneに。



職業奉仕の理念

「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」

ロータリーの発足後しばらくして、ロータリーの目的や存在理由について疑問を持つ人が出始めたので、ロータリーの新しい理想を考え、それを明確にするために委員会が設置されました。そこで委員長に任命されたのが、アーサー・フレデリック・シェルドンです。

彼は、悪徳と信用不安が横行し、消費者は自分で自分を守るしかなかった当時であっても、公明正大に経営している商店や会社が大成功している事実を知って、その理由を探求し、「職業は社会に奉仕する手段である」と他のロータリアンを納得させることができたのです。この考え方は、次第に他の都市に結成されたロータリークラブにも広がっていきました。

1910年に最初の全米ロータリー大会がシカゴで開かれ、全米ロータリー連合会が結成されました。大会委員長は、出席者に「私たちは、世界において進んで自己の任務を果たし、公德心を高めたいと願い、職業において高度の道徳的水準を守りたいと思っています」と語りかけたということです。

そして、この大会の閉会時に、シェルドンは、職業倫理の重要性を強調し、腐敗や不正は排除しなければならないことを明らかにし、

「19世紀の商慣習の特徴は競争です。出し抜かれる前に出し抜け、ということです。20世紀に入り、人類は賢くなりました。20世紀の特徴は協調です。『人間は、英知の光に照らして、正しい行為は報われる。職業は人類の奉仕の科学である。最もよく仲間に奉仕する者、最も多く報いられる』 (He profits most who serves his fellows best) ということがわかるようになりました」

と語りました。

この言葉は、1911年オレゴン州ポートランドの全米大会で報告され、のちに「He profits most who serves best」として、奉仕の対象をすべての人々とする表現に変え、ロータリーの標語の一つとなったのです。

2004年の規定審議会で「They profits most who serves best」に、また2010年の規定審議会で「One profits most who serves best」に変わりましたが、日本語訳「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」は変わっていません。

「超我の奉仕」

ベンジャミン・フランクリン・コリンズ

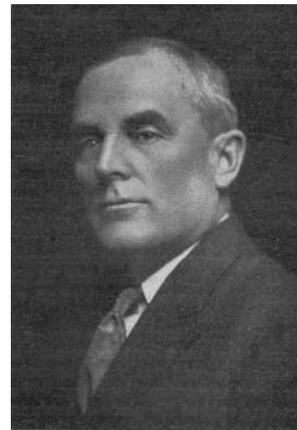
1911 全米ロータリー大会（ポートランド）

演説でコリンズが
「無私の奉仕」（Service not Self）を引用

⇒ 「無私の奉仕」はいきすぎであるとし、
「超我の奉仕」（Service above Self）に修正

人道的奉仕活動の理念

※ 当初は職業奉仕理念であったが・・・
（by田中毅氏『シエルドンの森』）



「超我の奉仕」

1911年、ポートランドの全米ロータリー大会の最終日に、ミネアポリスロータリークラブの会長、ベンジャミン・フランク・コリンズが、自分のクラブで採用し、厳守してきた原則は「Service not Self（無私の奉仕）」であり、これによってクラブを組織し、新しい会員にもこの精神を学ばせるのがよいと述べました。

この標語も参加者の賛成を得たのですが、のちに、人は皆自己を尊ばねばならないし、自己を守らなければならない、それならば自己を否定するnotよりも自己を第二に置くaboveの方がよいのではないかということで、「Service above Self（超我の奉仕）」に修正されました。

これらの二つの標語は、この大会ではいずれも非公式なものとして採用されており、公式の標語になったのは、1950年デトロイト国際大会においてです。

この二つの標語のうち、One profits most who serves best は職業奉仕の理念を表すもの

であり、Service above Self は米山梅吉公が訳された「サービス第一、自己第二」の心がけが事業成功の秘訣であることを示すとともに、社会奉仕、国際奉仕の人道的奉仕の理念であることを表していると考えられます。

ただ、この Service above Self に関して、前にもご紹介した田中剛氏の『シェルドンの森』には、次のような記述が見られます。

1917 年頃から Service not self に代わって Service above self が 頻繁に使われるようになり、1921 年の国際大会には Service not self、Service above self、Service before self を廃止して、He profits most who serves best のみにしようという決議案が提案されましたが否決されています。

この事実からも、1921 年の段階では、ロータリーのすべてのモットーは同一のカテゴリー、即ち職業奉仕に関するモットーであったことが推察されます。

Service above self の持つ意味合いが明らかに変わってきたのは 1927 年の四大奉仕採用からです。1937 年のニース国際大会において RI 会長ウイル・メーニア Jr. は「誰かが奉仕理念とは、他人のことを思い遣り他人のために尽くすことだと定義しました。他人のことを思い遣り他人のために尽くすことを通じて、ロータリアンは自らの職業の規範を高めながら、国際理解と親善と平和を推進するために自らの地域社会に役立つように努力しています。」と述べています。

この文章からは、誰が最初に「他人のことを思い遣り他人のために尽くす」という表現をしたのかを推し量ることは不可能ですが、この説明は明らかに人道的奉仕活動を指すものと考えられます。

(中略)

このようにして、ロータリーの奉仕理念の主流は職業奉仕から徐々に社会奉仕に変わっていったのです。

田中毅氏の以上の記述から、当初は職業奉仕理念だった Service above Self が、人道的奉仕活動の理念へと変化していった経緯が伺えます。

決議第23-34 第1条

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は - 「超我の奉仕」 - の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践理論の原則に基づくものである。

8

ここで、決議第 23-34 について考えてみましょう。

(この決議がなされた経緯については『卓話モデル1 ロータリーの職業奉仕 歴史と変遷 解説版』を参照してください。)

田中毅氏は、決議 23-34 がロータリーにとって重要である理由をいくつか挙げていますが、その最初で次のように述べています。(『社会奉仕 決議第 23-34 の徹底的分析』より)

最初の理由は決議 23-34 はロータリーの奉仕理念を確定した唯一のドキュメントだと言うことです。私たちは好んで Ideal of Service 奉仕の理想という言葉を使いますが、私は敢えてこれを 奉仕理念と訳していますが、数多いロータリーの公式文献の中で奉仕理念について触れているのは決議 23-34 のみです。従って、決議 23-34 を理解すれば、ロータリーの奉仕理念すなわちロータリーの哲学を理解することができるのです。

決議 23-34 の第一条には「ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は Service above self という奉仕哲学であり、He profits most who serve best という実践理論の原則に基づくもので

ある」と記載されています。

ロータリーには二つの奉仕理念があります。一つは他人のことを思い遣り、他人のために尽くそうという国際社会を含んだ対社会的奉仕活動に関する理念であり、私たちはこれを Service above self というモットーで現しています。もう一つは科学的かつ道徳的な経営方針によって、自分の事業や同業者の事業の発展を図ると共に、業界全体のモラルを高めていこうという職業奉仕の理念であり、私たちはこれを He profits most who serves best というモットーで現しています。ロータリーにとってもっとも大切なこの二つの奉仕理念を定義している唯一のドキュメントが、この決議 23-34 なのです。

一方で、本田博己氏は、初期のロータリアンは、二つのモットーを一体のもの（セット）として見ていたとして、次のように続けて述べています。（『ロータリーの希望 — 「奉仕の理念」とその実践をめぐって— 』

アーサー・F・シェルドンのスピーチ原稿（『ロータリーの哲学』1921）では、モットーを一つのモットー(a motto)として “Service Above Self—He Profits Most Who Serves Best” と一体化した形で示しており、ロータリーの奉仕概念の真髓を、この「一つのモットー」の中の “Service” “Self” “Profit” という3つの概念の本質とそれらの関係を説明することによって浮き彫りにしようとしています。

「決議 23-34」（1923年）でも同様に、この二つのモットーは、セットで示されています。

（中略）

二つのモットーを全体として一つの主張として捉えると、ロータリーモットーの真意は次のようになると考えられます。

サービスを自己の利益や都合より優先させよう。利益はサービスの結果である。相手のために最善のサービスをすれば、結果として最大の金銭的な利益と、大きな精神的満足が得られる。

ここで主張されている思想こそ、「奉仕の理想」の核心です。そして、注意しなければならないのは、これは決して利益を求めて奉仕するという「功利主義」的な思想ではなく、他者のために尽くすことが自らの幸せ(喜び)であるという、他者に奉仕すること自体を目的とする「利他主義」の思想だということです。究極の「奉仕の理想」とは、利己と利他の矛盾などない、利己と利他が完全に一致する状態だといえるでしょう。

【参考】 職業奉仕を理解するために

日本に由来からある商売哲学

・石田梅岩の石門心学 『都鄙問答』 など

・二宮尊徳の「報徳思想」 『報徳論』 『二宮翁夜話』 など

・近江商人 「三方よし」

・渋沢栄一 『論語と算盤』

西洋にあるピューリタンの職業倫理

・マックス・ウェーバー
『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

9

最後に、日本に由来からある商売哲学や、西洋にある職業倫理をご紹介します。

日本に昔からある商売哲学や、西洋の職業倫理を再確認し、それと職業奉仕とを比較検討し、類似点はもちろん、相違点に目を向けてみることも大切だと感じるからです。

『都鄙問答』にみられる石田梅岩の商人道、『二宮翁夜話』『報徳記』などで紹介されている二宮尊徳の「報徳思想」、渋沢栄一の『論語と算盤』、さらには近江商人の「三方よし」の経営哲学など、日本では商売と道徳を融合する考え方が脈々と受け継がれてきています。また、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が職業奉仕の考え方と類似している部分も多く、しばしば引用されてきています。

たしかに職業奉仕の考え方がこれらに重なることは多いと思われそうですが、相違点もあるように思います。したがって、ロータリーの職業奉仕の考え方を、これらとの比較において理解することは非常に意義あることであるとともに、一方で、その類似点、相違点について整理、認識しておくことも必要でしょう。

以下は、何回かご紹介した『シェルドンの森』に見られる田中毅氏の指摘です。ご参考にしてください。

日本では、東洋思想からロータリーが語られることが多いようです。

戦前から戦中にかけて、アメリカとの関係が悪化し、ロータリーがアメリカで生まれたことから、スパイではないかとか、フリーメーソンの一派ではないかと疑われ、毎回の例会は官憲の監視下に置かれた時期がありました。

当時、国家に忠誠を誓うことを表すために始められたのが、国旗掲揚と国歌斉唱であったと言われていました。

しかしその努力も功を奏さず、遂に 1940 年に、RI を脱退せざるを得ませんでした。その後の一時期は、月曜会、火曜会と名を変えて、例会を続けたものの、例会の場で、敵国人であるポール・ハリスを語ったり、アーサー・シェルドンを論じたりすることは不可能でした。

そこで、ロータリーの発想と類似点がある二宮尊徳の報徳思想や、石田梅岩の石門心学や、「三方よし」とする近江商人の経営理論から職業奉仕を説いて、それに代えざるを得なかった訳です。日本人にとって非常に理解しやすい方法には違いありませんが、それが果たして本来の職業奉仕を語ったことになるのかどうかは、はなはだ疑問の残るところです。未だに profit を精神的な利益と説く人がいるのも、その辺に理由がありそうです。

過酷な資本主義の競争の中から、それを修正するために生まれた思想と、徳を重んじる封建的な社会から生まれた思想とは、本質的な違いがあることは誰の目にも明らかです。戦後 60 数年も経た現在、いまだに同じような東洋的発想で職業奉仕が語られることは理解に苦しむところです。

ヨーロッパでは基督教の天職論と職業奉仕を結びつけて考える人が多いようです。マックス・ウエーバーによるピューリタニズムの天職論がロータリーの職業奉仕の根底にあると説く人もいますが、これも明らかな間違いです。

マックス・ウエーバーが彼の代表的著作である「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を発表したのは 1905 年のことであり、その中で、西洋近代の資本主義を発展させた原動力を、主としてカルビニズムにおける宗教倫理から産み出された世俗内禁欲と生活合理化であると説きました。

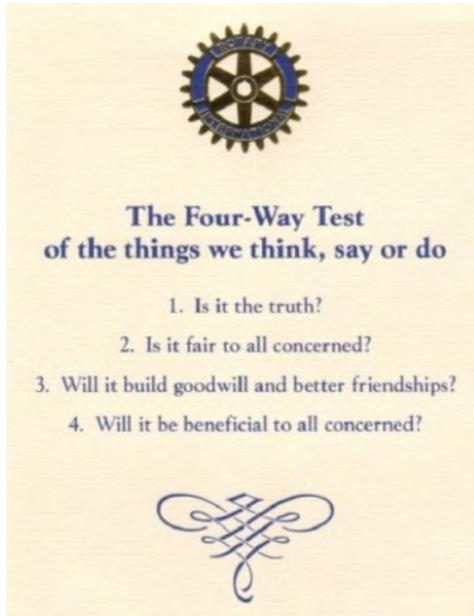
マックス・ウエーバーは、カルビニズムの概念に基づいたピューリタンの労働倫理として、天職としての仕事に励むことの必要性、現世での成功、基督教による魂の救済を強調しています。即ちウエーバーが天職論を発表したのは 1905 年であり、シェルドンは

それより前の 1902 年に、修正資本主義を取り入れた職業奉仕の理念をすでに構築しており、それを実社会で応用するために、シカゴでビジネス・スクールを経営していましたから、シェルドンがウエーバーの影響を受けたという説は間違いです。ロータリーでは職業のことを Vocation と表しており、この Vocation という言葉の語源は「天職」であることは論を俟ちません。しかしロータリーが Vocation という言葉を使い始めたのは 1927 年の四大奉仕採用時からであり、シェルドンの奉仕理念とは何の関係もありません。

シェルドン自身は、経営学として職業を説いているので、宗教的要素を入れることを殊更嫌い、彼の全ての文献を検索しても、神を引き合いにだしたり、God という単語を使ったりすることを避けています。また Vocation という言葉は一切使わず、すべて Occupation と表現しています。

以上が田中氏の記述です。

テイラーと四つのテスト



1932年
ハーバートJ・テイラーが
クラブ・アルミニウム製品
株式会社を破産の危機から
救うために作ったもの



四つのテスト 言行はこれに照らしてから

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるか どうか

10

テイラーと四つのテスト

ロータリーの哲学を端的に表現し、職業奉仕の理念の実行に役立つものとして、四つのテストがあります。このテストは、シカゴのロータリアンであり、後にロータリー創始 50 周年(1954-55)に、国際ロータリー会長を務めたハーバート J. テイラーが、1932 年の世界大恐慌のときに考えたもので、商取引の公正さを測る尺度として、以後、多くのロータリアンに活用されてきました。

彼は、シカゴに本拠をおくジュエル・ティー(Jewel Tea)株式会社の代表役員でしたが、1932 年にクラブ・アルミニウム(Club Aluminum)製品株式会社を破産の危機から救ってほしいと要請され、クラブ・アルミニウム社に移り、この会社を再生させる決心をしたのです。

大不況の中で、低迷している会社を再生させるには、会社の中に、同業者にはない何かを育成しなければなりません。テイラーはその何かに社員の人格と信頼性と奉仕の心を選んだのです。そして、その育成の指針として 会社の全従業員が使えるような倫理上の尺度と

して作られたのが四つのテストです。

四つのテスト

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

言行はこれに照らしてから行うべし

テイラーの会社の 4 人の部長は、それぞれ宗教的立場が違いましたが、全員、このテストが、自分の信じる宗教に合致するだけでなく、会社や個人の生活にも模範となる価値観を与えてくれると述べたということです。

四つのテストは簡単な言葉ですが、クラブ・アルミニウム社の苦境期の決定を下す基盤となりました。会社の広告も、テストに照らし合わせて検討し、最上、極上などの表現を避け、製品の実際の姿を手短に述べるかたちに変わりました。ライバル会社への非難、悪口は、広告や販売推進パンフレットから姿を消しました。従業員は四つのテストを暗記するよう求められ、やがて、テストは、仕事のあらゆる面における指針となりました。

その結果、信頼と好意の雰囲気、取引先や顧客や従業員の中に生まれ、会社の業績が次第に好転していきました。5 年後の 1937 年までに 40 万ドルの負債は利子とともに完済され、その後の 15 年間で会社は株主に対して 100 万ドル以上の配当を行い、その資産は 200 万ドル近くになりました。テストによって自分の生き方が変わった、と述べる手紙が数えきれないほどハーバート・テイラーのもとに寄せられたということです。

RI 理事会は、1943 年に正式に四つのテストを採択し、その著作権は、1954 年、ハーバート・テイラーが RI 会長の時に、彼から RI に寄付されました。また、2004 年の規定審議会において四つのテストを明記した決議が行われています。四つのテストは職業奉仕の理念を端的に表すものとして、国際ロータリーにより多くの言語で出版されています。

それでは、四つのテストのそれぞれについて、英語の原文と日本語訳を見比べながら、考えてみることにしましょう。

四つのテスト 言行はこれに照らしてから

The Four-Way Test Of the things we think, say or do

11

ロータリーの目的(綱領)、職業宣言、五大奉仕の定義がロータリーの奉仕の理念とその実践を示すものであるのに対し、四つのテストは日常の商取引・産業活動におけるロータリアンの言行の自己評価のためのテスト形式の規準として導入されたものであります。

ただ、新入会員にロータリーを最初に説明するときに、四つのテストがよく使われるように、このテストの邦訳には、ロータリー精神が、ロータリアンのみならず一般の職業人にも理解できるような形で、簡潔かつ的確にまとめられています。ロータリークラブあるいはロータリアンが理念の実践を通して社会に対する真実のともし火となる時の重要な規準となるといっても過言ではないでしょう。

一方で、田中毅氏は、『四つのテスト 新しい解釈』の中で、四つのテストは、厳密に商取引についてのものであるとして、次のように述べています。

まず最初に考えなければならないことは、この四つのテストは、決して事業の倫理基準や商道徳を高めることを目的に作られたものではなく、倒産の危機に瀕していた調理器具メーカーを再建させるために作られた、極めて現実的な基準だということです。

すなわち四つのテストというのは、商取引をする当事者同士が納得づくで取引できる基準を示したものであるため、学校や駅に張り出したりして日常生活に適用するものではありません。よく、癌の告知や死期の告知に四つのテストを適用すべきか否かとか、醜い女性に、正直に醜いと告げるべきか否かと言った議論をする人がいますが、四つのテストはあくまでも商取引にのみ適応するように作られた基準であることを忘れてはなりません。商取引はシビアなものですから、それを厳密に判定する基準が必要ですが、一般の生活に夢や希望を与えるためにつくささやかな嘘は、人生の潤滑油として必要不可欠なものなのです。

Four-way test 四つのテスト

「事業を繁栄に導くための四通りの基準」ならば、当然 Four-way tests と複数形になるはずですが。これが単数形であるのは、事業を繁栄に導くためには、四通りの基準を一つずつクリアすればいいのではなく、四つ纏めたものを一つの基準として、そのすべてをクリアしなければならぬことを意味します。ロータリーの綱領が Object of Rotary と単数形であり、四つの項目が渾然一体となって、一つの綱領を形作っているのと同様です。

1. 真実かどうか

1. Is it the truth?

【論点】「真実」とは？（「事実」と同じか、違うのか？）

- 事実と真実とは強いつながりを持っているが、同じではない。
- 真実とは、互いに関連するいろいろな事実をうまく説明できる、あるいは、それらと合致する考え方とも言える。
- 真実は、それに関わる人、時代、場所とともにある種のゆらぎを示しつつ、次第に深まり、最終的には唯一つのものに収斂していく。

12

Is it the truth? の邦訳は「真実かどうか」です。ただ、この訳で、真実とは嘘偽りのない本当のことというように単純に考えるのではなく、後にのべるように、もう少し深く考えて、「物事の原理・原則、根本原理に適っているかどうか」と理解するのがよいと思われます。

田中毅氏は、

商取引において、商品の品質、納期、契約条件などに嘘偽りがないかどうかは、非常に大切な基準です。真実というのは、「80%の真実」という言葉が示すように、人間の心を通じたアナログ的な判定であるのに対して、事実とはその事実あったのか、無かったのかの二者択一を迫るデジタル的判定ですから、ここでは「**事実**かどうか」という言葉を用いるべきでしょう。

と述べています（前掲『四つのテスト 新しい解釈』）。「真実」を「事実」と翻訳するべきだという考え方です。

そこで、「真実」とは何かについて少し考えて見たいと思います。

辞書を引くと、真実とは、「嘘偽りのない本当のこと」と書いてあります。商取引の世界での本当とはどういうことか、事実という語とどう違うのかを考えてみましょう。

あるデパートで大量に売れ残ったレインコートを処分するのに広告主任が「当店には売れ残りで処分しなければならないレインコートが沢山ある。これらは、店晒しの品で、いたんだものも含まれているが、新品同様のものもある。格安の値段で提供させていただくので、是非ご来店いただきたい」という意味の広告を出したところ、レインコートは僅か30分で売り切れたという話を 2680 地区パスト・ガバナー 深川純一氏が講演で紹介しておられます。

深川氏はこれらの客は真実を買ったのだと述べておられます(職業奉仕のお話、国際ロータリー2660 地区 2006-2007 年度職業奉仕委員会 参照)。広告を見て集まった客は、デパートが至急に処分しなければならなくなった商品の品質とその理由を正確に述べた広告の内容の底に潜む「商品を廃棄処分してしまうのではなく、それを格安の値段で提供することで、デパートも客も幸せを共有しよう」という広告主の真実を読み取ったのです。事実の全てを正確に伝えることで、相手にその根底にある真実を読み取っていただけるという好例です。

もし、上記の広告文から『店晒しの品で、いたんだものも含まれている』という内容が抜け落ちていたとしても、その内容が事実でないとはいえません。しかし、それでは、内容の一部欠落がたとえ故意によるものでなくても、真実は伝わらないのです。

一方、自分の競争相手やその商品の欠点を広告に書き込むようなことは、前記の深川氏も述べておられますが(職業奉仕のお話、国際ロータリー2660 地区 2006-2007 年度職業奉仕委員会 参照)、たとえ、それが長所とともに書き込まれていて、その商品の事実の全てを記述するものであったとしても、真実を伝える広告とはいえません。競争相手を誹謗し、自分の利益のみを増大しようという意図が含まれている文章は真実を伝えているとはいえなからず。このような広告は四つのテストの 2 番目の FAIR の原則にも反するものがあります。先にも述べたように、四つのテストのそれぞれを個別のものとは考えずに、全体を一つに融合したものと捉えて、自分の言行を判断する事が重要です。

このように、事実と真実とは強いつながりを持っていますが同じではありません。真実とは、互いに関連するいろいろな事実をうまく説明できる、あるいは、それらと合致する考え方ということも出来ます。

時の経過とともに多くの正確な事実が蓄積され、それらをつかさどる根本原理も少しずつ深まっていきます。真実は時代とともに深化するのです。自然科学の分野に例をとれば、「物はすべて分子という非常に小さい粒子から出来ている」という自然科学者でない人達でもよく知っている分子の概念も、それが提唱されたときから現在までの間に、多くの実験事実の積み重ねによって、非常に精緻なものとなりました。

真実は、また、人によっても異なることがあります。同じ事実を知ったとしても、その人の経験や洞察力によって、いくつかの似通った事実を統一して説明できる概念、すなわち抽出できる根本原理、真実が若干違うこともあるのです。その意味で、真実はその人の信念、あるいは、確信の性格を持つこともあります。

事実は、また、場所による偏りを示すこともあります。したがって、それに基づく真実も場所によって多少の違いが出てくることになります。

真実は、それに関わる人、時代、場所とともにある種のゆらぎを示しつつ、次第に深まり、最終的には唯一つのものに収斂していくといえます。ロータリーの奉仕の精神、すなわち、ロータリーの真実の変遷にもそれが見られるように思います。

2. みんなに公平か

2. Is it fair to all concerned ?

【論点】 「fair」「all concerned」

- 「fair」は、「公平」ではなく「公正」
- 「concerned」は、「四つのテスト」を商取引に限るか否かで、「取引先」と考えるか、「みんな」でよいか、解釈が変わる

13

ここでは、まず、田中毅氏の前掲書『四つのテスト 新しい解釈』の記述を示しましょう。

fair と all concerned という言葉の翻訳に問題があります。fair は公平ではなく公正と訳すべきでしょう。公平とは平等分配を意味するので、例え贈収賄で得た unfair 不正なお金でも平等に分ければ、それでよいこととなります。all concerned は all だけが訳されており、肝心の concerned が省略されています。冒頭に述べたように四つのテストは「商取引」の基準として定めた文章ですから、この concerned (関わりのある人、関係する人) は「取引先」のことを意味することは明白です。従ってこのフレーズは「すべての取引先に対して公正か」ということを意味します。

以上が田中毅氏の記述です。

Is it fair to all concerned? の fair は、人々に対して、その場の状況に応じて、私的感情をあまりまじえずに、偏り無く対処することを意味しますので、この文章の邦訳は「みんなに公平か」よりは、田中毅氏の言われる「みんなに公正か(みんなに公正に対処しているか)」の方が原文の意味を適切に伝えていると思われます。

ロータリアンの職業宣言の第4項には、この四つのテストの2番目の文章とよく似た文章 (Be fair to my employer, employees, associates, competitors, customers, the public, and all those with whom I have a business or professional relationship)が書かれています。この文章の fair は公正と邦訳されています(6.2 小節参照)。

真実は、時として信念の要素を含むことがあります。それが相手を困らせることが無いような配慮も要するという事を、言外ににじませていると言えないこともありません。

四つのテストは商取引に関連して作られたものであり、all concerned は取引先のことなのに、四つのテストの邦訳は all concerned を all と同じに捉えている、という田中毅氏の指摘は、このテストの使用を商取引に限るのであれば、全く正しく、反論の余地はありません。しかし、ロータリーの会員にはその職業が商取引には直接関係しない人達がたくさんいることや、四つのテストが商取引以外の場でも使われる可能性が高いことを考慮すれば、ロータリアンの日常生活のすべての言行に適用できる現行の邦訳の方が適切とも考えられます。

3. 好意と友情を深めるか

3. Will it build goodwill and better friendship ?

----- 【論点】 「goodwill」 「beneficial」 の解釈 -----

4. みんなのためになるかどうか

4. Will it be beneficial to all concerned ?

14

ここでも、田中毅氏の前掲書（『四つのテスト 新しい解釈』）に見られる記述を先に紹介しましょう。

Will it build goodwill and better friendship? 好意と友情を深めるか

goodwill は単なる好意とか善意を表す言葉ではなく、商売上の信用とか評判を表すと共に、店ののれんや取引先を表します。すなわち、その商取引が店の信用を高めると同時に、よりよい人間関係を築き上げて、取引先を増やすかどうかを問うものです。「**信用を高め、取引先をふやすか**」と訳すべきです。

Will it be beneficial to all concerned? みんなのためになるかどうか

Benefit は「儲け」そのものを表す言葉です。商取引において適正な利潤を追求することは当然なことであり、決して恥ずべきことではありません。ただし、売り手だけが儲かった、また買い手だけが儲かったのでは公正な取引とは言えません。その商取引によって、すべての取引先が適正な利潤を得るかどうか問題なのです。「**すべての取引先に利益をもたらすか**」と訳すべきでしょう。

以上が田中毅氏の記述です。

3 番目の Will it build goodwill and better friendship? は「自分の考え、意見、行いが他との好意・友情を一層密にするか」という問いかけであり、他の人々と付き合うときの、ごく自然で基本的な対処の仕方です。

ここではある程度の私的な感情がまざるのはやむを得ませんが、大事なことは、それが他を排除するものであってはならないということです。

4 番目の Will it be beneficial to all concerned? の beneficial は、四つのテストを商取引のみに関連するものと考えれば、「利益をもたらす」という形容詞になりますが、ここでは、上にも述べたような理由で、もっと広い意味に考えて、「有益な」と訳すのがよいと思われます。

したがって、この文章の邦訳は現行の「みんなのためになるかどうか」が適切ということになります。道徳的な基準は、自分が何かを行うときの他への態度の規範であります。それは当然、直接の相手だけでなく、その周辺の人達への配慮も含んでいなければなりません。これが「みんなのためになるかどうか」であると考えられます。「好意と友情を深めるか」の判断で私的な感情が強くなり過ぎないように戒めているという解釈もできます。

いずれにしても、ロータリアンの言行は「この四つの問いのすべてに『イエス』と答えられるものでなければならない」ということを忘れてはなりません。

「ロータリーは人づくり」

米山梅吉

ロータリーの例会は人生の道場 人づくりの修練の場である。

佐藤千尋

芋の子を桶の中にぶち込んでかき廻す様なもので、芋と芋とがお互いにこすり合って自然と黒い皮がむけて綺麗になる—そのかき棒になるのがロータリーの計画する様々の活動である

ハーバート・テラー

“Rotary is maker of friendships and builder of men”
『ロータリーとは、友情を育み、人と社会をつくり、世界各国の人々の間に善意と友情を芽ばえさせる団体である』

ビル・ロビンズ

“Rotary’s first job is to build men”
(ロータリーの第一の仕事は人を作ること)

向笠広次

『ロータリーの効果は精神的汚染の治療に止まらず、個々のロータリアンの性格をも変えるという積極的な効果をもたらす。つまり、真に熱心なロータリアンに対する報いは、より親切な心とより優れた性格が与えられることである』

15

さて、それでは、4大用語の最後、「ロータリーは人づくり」についてお話をしたいと思います。

日本の初代ガバナー 米山梅吉氏が語ったとされる「ロータリーの例会は人生の道場、人づくりの修練の場である」という言葉は、あまりにも有名でさまざまに引用されています。

そのほかにも人づくりに関しては、多くの先人たちが意味のある言葉を残しています。別府中央ロータリークラブの初代会長であった鳴海敦郎氏による『ロータリーの探究 (NO. 331)』には、次のような記述があり、非常によく整理されていますので引用させていただきます。

佐藤千寿パスト・ガバナーの著書に『ロータリーは人を作る』というのがありますが、ロータリーの人作りとは、芋の子を桶の中にぶち込んでかき廻す様なもので、芋と芋とがお互いにこすり合って自然と黒い皮がむけて綺麗になる—そのかき棒になるのがロータリーの計画する様々の活動である、と言っています。

ハーバート・テラー 1954-55 年度国際ロータリー会長は “Rotary is maker of friendships and builder of men” と言っていますが、彼はこの言葉を含めてロータリーを次のように定義しています。

すなわち、『ロータリーとは、友情を育み、人と社会をつくり、世界各国の人々の間に善意と友情を芽ばえさせる団体である』と言っています。

そしてまた、『ロータリーのしなければならない大きな仕事に人格者を育てること、つまり人づくりがあるのではないか。また、そのことに関してロータリーには大変な責任があるのではないかと、わたしは思っています。政界や実業界において、また地域社会や家庭において— つまり、生活の様々な領域において有能な役に立つ人物を育成すること— そのことこそロータリー・クラブのなすべき仕事ではありますまいか。よい市民、よい指導者を育て上げることは是非必要なことであります。』と言っています。

(ハーバート・テラー、菅野多利雄訳：「我が自叙伝」より)

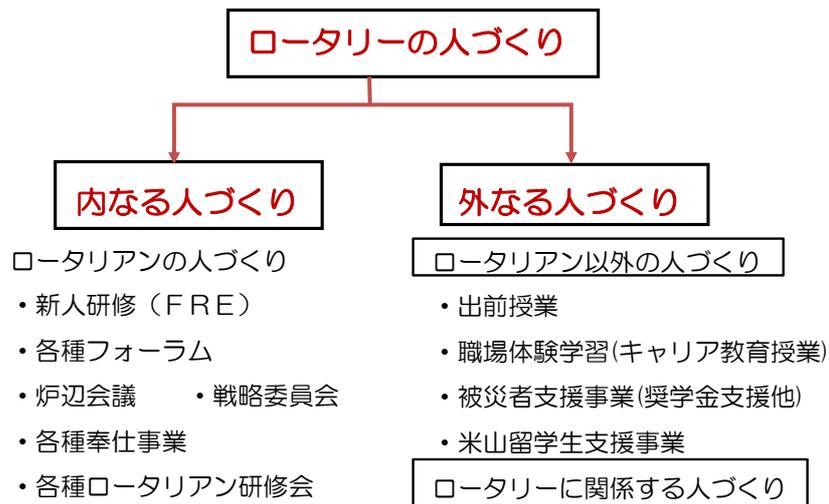
また、ビル・ロビンズ 1974-75 年度国際ロータリー会長は “Rotary’s first job is to build men” (ロータリーの第一の仕事は人を作ること) と言っています。

ロータリアン誌 1973 年 10 月号 (ロータリーの友 1973 年 11 月号) に『ロータリーは人間を変えるか』という誌上シンポジウムの要約が載っていますが、これは世界 4 カ国から 7 人のロータリアンの意見をまとめたもので、結論として、ロータリーは多くの点で人を変える、全部よいほうへ変えるとしています。

向笠広次 1982-83 年度国際ロータリー会長は、『ロータリーの効果は精神的汚染の治療に止まらず、個々のロータリアンの性格をも変えるという積極的な効果をもたらす。つまり、真に熱心なロータリアンに対する報いは、より親切な心とより優れた性格が与えられることである』と述べています。(ロータリーの世界より)

以上が『ロータリー探究』からの引用です。ご参考になしてください。

内なる人づくり 外なる人づくり



人づくりは、その対象がロータリアンであるか否かによって、「内なる人づくり」と「外なる人づくり」に分類することができます。

内なる人づくり、すなわちロータリアンの人づくりとしては、新人研修に始まり、各種フォーラム、炉辺会議や戦略委員会、各種の奉仕事業やロータリアンの研修会などをあげることができるでしょう。

また、外なる人づくりは、ロータリアン以外に対する人づくりですが、米山留学生や青年交換学生などもこれに含めて考えることができそうです。

ここでは、各ロータリークラブで数多く実施されている出前授業や職場体験学習について、この後、簡単に整理しておきたいと思います。

* なお、職業奉仕活動をいかに実施していくことが望ましいかという点につきましては、別途『職業奉仕活動 実践の手引き』を第 2660 地区のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。

出前授業、職場体験学習を実践する目的

出前授業

ロータリアンの自らの職業を通じ、事業生活の中で青少年を育成するという奉仕の理念のもとで授業を行う。

- ① いろいろな分野の専門家が学校に出かけて生徒と語り合う。
- ② 幼稚園から大学までの関係を深め、互いに教員を支援して授業する。
- ③ 生徒と先生が互いに意見を交換するように進める。

職場体験学習

ロータリアンの自らの職業現場において青少年に働くことの意義を理解させ、礼儀作法を教え、実社会での職業経験を通じて個人の将来に向けた希望を抱かせることを目的とする

- ① 生徒が地域の企業や商店に出かけて、経営者や社会で働く人たちとの直接のふれあいを通してその生き様を知り、働くことの意義を体得し、それを通して学ぶことの必要性を理解する。
- ② 職場で学ぶことによって仕事の楽しさと厳しさを知るとともに、仕事に対する安易な考え方をなくして、職業観を養う。

職業奉仕活動の中でも「外なる人づくり」として代表的なものに、出前授業と職場体験学習があります。

ここで大事なことは、これらをロータリーが実践することの意義や目的です。それらについては、このスライドに要点を示しておりますが、さらに私たちが深く認識しておかなければならないのは、私たちロータリーが実践している根底に、職業奉仕の考え方があるということです。

先ほど紹介しました『職業奉仕活動 実践の手引き』でもこの点を強調いたしております。重要ですので、重複いたしますが、ここに引用いたします。(同書P.6)

・・・さまざまな職業奉仕活動を実践する際に「大切なこと」は何でしょうか。いろいろな考え方があってよいのですが、「ロータリーの職業奉仕と言えるためには・・・」という視点は、欠かせないのではないのでしょうか。

そして「ロータリーの職業奉仕」と言える視点の中に、「四つのテスト」「超我の奉仕」「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」などの基本理念や、「内なる人づくり」「外なる人づくり」といった考え方が含まれるのです。

以上のことを再確認するために、『ロータリーの心と実践（2015年3月改訂版）』（2015年3月 国際ロータリー第2660地区 研修委員会）に記載されている文章を引用いたします。

・・・職業奉仕とは、職業を通して社会のニーズをほぼ完全な形で満たせるよう努力を重ねるということです。それによって、自己の職業の品位と道德水準を高め、社会から尊重される存在にすることが出来るのです。また、それによって日々の奉仕活動が行いやすくなり、効果も向上する筈です。

ここで大事なことは、ロータリアンは日々の仕事を通して生きる力の根本である自らの道德的能力を高め、それを社会に反映させることを使命と考えて努力しているということです。すなわち、ロータリアンは日常の職業活動を通して、自分の職場の従業員、取引先の人達やその関係者、ひいては地域社会の人たちの模範となり、生きる力の根源である道德的能力を向上させることに努めているのです。このような仕事の仕方をロータリーでは、職業奉仕と呼んでいます。皆さんが真のロータリアンであるか否かは、皆さん自身とその職場が社会の規範となるように努力することを自己の使命と考えているか否かにかかっているのです。・・・

最後に・・・ 人づくりは自分づくり

「ロータリーは人づくり」と考えていますが、人が人をつくることはできません。

すべて各人が自ら成長をしていく「自分づくり」が基本であり、ロータリーはその成長の後押しをする役目です。

「人づくりは自分づくりの支援の場」ととらえ、ロータリーの発展に寄与することが必要です。

最後に、「人づくりは自分づくり」で締めくくりたいと思います。

先ほど引用した文章の中にも、

「・・・職業奉仕とは、職業を通して社会のニーズをほぼ完全な形で満たせるよう努力を重ねるということです。それによって、自己の職業の品位と道德水準を高め、社会から尊重される存在にすることが出来るのです・・・」

という文言がありました。

「自己の職業の品位と道德的水準を高め、社会から尊重される存在になる」そういった自分を作り上げるという意味で、「自分づくり」がすべてに優先して大切なことだと言えるのではないのでしょうか。そして「自分づくり」こそ、職業奉仕の原点のように思います。

【引用文献】

今回の卓話モデルの解説文は、文中に引用文献の記載のないものは、そのほとんどを下記1または2から引用しております。

また、文中に引用文献を記載したものは、下記3以下に記した通りです。

1 『ロータリーの心と実践』

(2015年3月 国際ロータリー第2660地区 研修委員会)

https://www.ri2660.gr.jp/khwpress/?page_id=1352

2 『ロータリーの職業奉仕入門 (Q&A) 2018年5月8日改訂版』

([http://www.ri2660.gr.jp/2018-19/wp-content/uploads/2018/06/ロータリーの職業奉仕入門 \(Q&A\) 【改訂版】.pdf#search=%27職業奉仕+2660地区%27](http://www.ri2660.gr.jp/2018-19/wp-content/uploads/2018/06/ロータリーの職業奉仕入門 (Q&A) 【改訂版】.pdf#search=%27職業奉仕+2660地区%27))

3 『シェルドンの森 ロータリーの真実を求めて』 田中毅著 源流の会

<https://www.rotary-bunko.gr.jp/pdf/R-201702/28-1.pdf#search=%27アーサーフレデリックシェルドン%27>

4 『ロータリーの希望 — 「奉仕の理念」とその実践をめぐって—』 国際ロータリー

第2840地区 (群馬) 2013-2014年度 ガバナー 本田 博己 (前橋ロータリークラブ)

<http://www.rid2840.jp/honda/documents/rotarynokibou.pdf#search=%27ロータリー+利己と利他の矛盾を和らげる%27>

5 『社会奉仕 決議第23-34の徹底的分析』 田中毅 源流の会

<https://genryu.org/tanaka/general/00103jp.pdf#search=%27決議第23-34+第1条%27>

6 『四つのテスト 新しい解釈』 田中毅 源流の会

<https://genryu.org/tanaka/general/00106jp.pdf#search=%27四つのテスト+新しい解釈%27>

7 『ロータリーの探究 (NO. 331)』 別府中央ロータリークラブ 初代会長 鳴海敦郎

<http://www.narumi-clinic.jp/reportdata2/1209024506/index.html>